

新しい高齢社会のあり方を求めて

・・・高齢協全国組織化がもたらすもの・・・

横田安宏
協同総研

ご縁を得て、この6月末、協同総研の常任理事に選任されました。自己紹介を兼ね、新参者として所感の一端を申し述べてみたいと思います。

国際長寿センター・高連協・高齢協

まずはこの組織とのご縁から。民間企業に職を得て38年、今年3月で定年退職を迎えました。それが労協連とのきっかけといえばそのとおりですが、多少説明が必要です。今から9年半まえ新潟の良さを満喫していた私に、突然、転勤命令が下りました。それが、出来てから間もない国際長寿センターでした。この組織は、厚生省の指導のもと官・産・学の資金と英知を結集し、人口高齢化のもたらす諸問題を、国際的な切り口で比較研究、情報交換などをしようというもので、その事務局を担当するために呼び戻されたというわけです。それ以来9年余り、未経験ゆえの手探り状態のなか、厚生省や高齢化問題に関する国内外のオピニオンリーダーたちの間をヒト・モノ・カネをめぐる球拾いの毎日でした。

その間の1999年国連が定めた国際高齢者年に、日本の高齢者団体の連携を標榜して発起人の一人となり、高齢者年NGO連絡協議会（高連協）が結成されました。総務庁との連携のもと、高齢者団体の求心力が初めて発揮された点で、意義深い活動となりました。その流れは高齢社会NGO連携協議会（同じく高連協）として今日も引き継がれており、高齢者憲章の発表、インパク（インターネット博覧会）への参画、社会保障制度改革に関する提言などは、新旧高連協活動を通じての大きな財産といえるでしょう。今後は、来年の4月、スペインのマドリードで20年ぶりに開催される国連の第2回「高齢化に関する世界会議」への関わり方が大きな課題といえます。

その高連協活動が、まさに労協連グループとのご縁のきっかけとなりました。高齢協の名において加盟の労協連と国際長寿センターとは座席が隣りあわせ、役員会でも一緒にの親しい仲間同士でした。特に1996年9月日比谷公会堂で行われた東京高齢協の設立総会に招待されてその組織力を実感して以来、労協連は私にとって、常に気になる存在だったのです。

高齢協の全国組織化

その後も「AARPの挑戦」の出版や国際高齢者年記念イベント、さらには、年末恒例のベートーベンの第9合唱などに見る労協の組織力と実践力は、ほかの高齢者団体と比べて格段にバイタリティあふれるものに思われました。特に外側から見ていた私の目には、労協・高齢協の活動のありかたが、二つの点で大変新鮮に見えたのです。

一つは、高齢者問題の持つ二つの側面をきっちりと抑えて実践していた点です。確かに高齢者には社会的弱者としてくられる側面はあります。しかし大半の8～9割の人たちは、元気老人といってよいのも事実です。その点高齢協は「生きがい・仕事起し・福祉」の視点から、しっかり両面をとらえて活動しているように見受けられます。特に全国のコミュニティごとに地域福祉事業所をつくり、仕事起しと介護活動の拠点にしていこうとの構想は、なかなか気宇壮大でヴィジョンに富んだものといえましょう。

二つ目は、活動が老若男女すべての世代の協力によって行われている点です。一般にはこの種の活動は、高齢者だけで行われたり、特に女性だけの参加によって行われたりする傾向があります。その点若い男女が参画している姿がとても新鮮に見えましたが、これは労協の仕事起しから来る特徴といえましょう。

その高齢協がたった5～6年の間に都道府県単位に30近くにもなり、いよいよ今年11月3日を期して全国組織になると伺ったのはこの春、まさに労協グループ入りのお誘いを受けていた頃でした。日本に高齢者の全国組織が出来るのは初めてのことです。アメリカのAARPや、イギリスのエイジコンサーンのような組織の萌芽が誕生することは、日本の高齢者問題にとっても夢と希望が生まれる意味で、とても明るいニュースだといえましょう。まだまだ「本籍国際長寿センター」の私なので他人事のような物言いですが、まことにおめでたいことです。ところで遠くの富士山は綺麗に見えるものです。

これから自ら高連協との関わり合いが深くなるにつれ、いろいろとあらもみえ、問題点が気になるようになるでしょう。それは覚悟の上で、今はこの新しいご縁を大切に、今までの経験と今後への関わりを大切にしたいと考えている次第です。